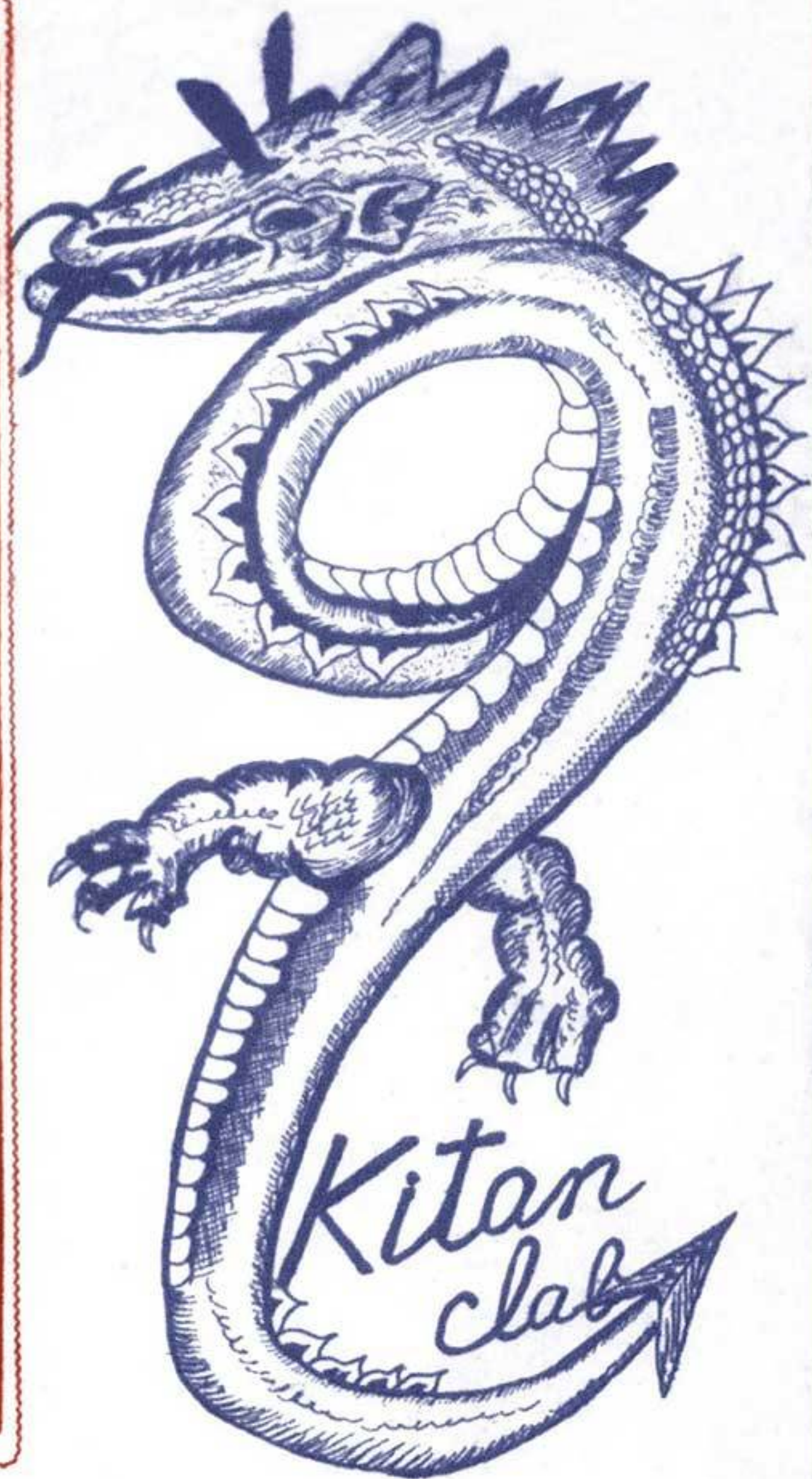


奇譚クラブ



怪奇探奇特輯號

11

チューブ入
アカネ煉歯磨
アカネ歯ブラシ



大阪・堺
アカネ屋本舗

あらゆる
古書籍・雑誌買入

別次す
特品金
上送
以償に
價評ち
準高直
標最第

文洞書房

堺市東湊町一丁(御陵道)

□ 原稿募集 □

- 一、軟派文藝小説、コント、詩
- 一、特異習俗、變態、犯罪實話
- 一、探偵小説、獵奇、怪奇讀物
- 一、用紙及び長短は隨意
- 一、締切日は別に定めず、翌月掲載
- 一、採用篇には相當稿料を呈す
- 一、不採用篇も内容により謝辭を呈す
- 一、技巧よりも内容本位、新人の投稿を歓迎す
- 一、郵券同封の分には、原稿返却す
- 一、送り先

堺市菅原通四ノ三〇

曙書房内

奇譚クラブ編輯部宛

火河譚

クラブ



衣手に嵐の吹きて寒き夜を
君來まさずはひとりかも寝む
今さらに戀ふとも君に逢はめやも
寝る夜をおちす夢に見えこそ

目次

生殖器崇拜と性的神	左内中浅	海海原川	山勇春	人造美曉
土俗玩具の研究(一)	杉八鮎信	田木川田	きよ久和春	し一夫男
諸國艶咄集成	みき	Y		登生
観客を蕩酔させるフラフラダンス	水浮	原田	幸次	助雄
ゴム製雨外套の辯	弓青忍夢鈴	創木頂幻亭	富寺痴城	忍兒穠庵夫
産婦人科醫の見た	玉地耕造			
世相 A B C	木村一三			
接吻と口腔の科學	芦田敬介			
春宮圖と禁脈	後藤二三夫			
にせの羅切坊主				
一九四八年のある風景				
スピード時代				
當世娘氣質				
粹人媛語				
桃色きだん世間噺				
きだんゴシツブ				
コント一枚の遠い				
上海の魔窟				
妖花亂れるくるわみち				
「金塚街道」に拾う夜の大阪				
三十過ぎたる獨身婦人の危機				
妖怪物語 お化け狐と狐憑き				
好色落語 臍の次				
珍談 御用の物				
七つの子供				
人肉の味				
世はさまさま 浮世色模様				
街の裏道				
Y段談義 あらべすく				
桃色テロの横行				
好色本に現れた時代の早熟なる處女				
編集おぼえ書き				

生殖器崇拜と性的神

土俗玩具の研究

(一)

左海山人

迷信と土俗玩具と性的神とは離すことの出来ない密接關係を持つてゐるがその間の消息は極めて、デリケートなもので研究すればする程、興味が増して、日本の古い昔の人情生活の一端を窺ふことが出来る。

嚴肅にして眞面目な研究で面白半分にするものではない、往昔の人情と習慣と生活様式等を研究するため的一种方式たるに外ならない。

此の研究に没頭するに當つて、最も驚いたのは性的神に甚だ多くの種類の存することである殊に關東各地をその隨つとも、美濃、信濃、駿河の各地に又此の性的神の類が多いことである。

如何に往昔の人々が生殖器を神として崇敬したかということを證する幾多の資料がある。

玩具の如きでも、此の種のものが可なり多く、何物かを暗示する形態のものが極めて多い。

一例を示すならば丹波の稻刈人形の中の「大黒大根」の如きもそれで此の玩具は大黒さんが大きな二股大根を抱いてゐるものであるが、その大根の二股の處に手を入れてゐるな

どは明らか何にかを暗示し、當時の清嚴にて何等の邪心のない少年少女を、此等の玩具が或る種の教育をしたことは明らかである。

此の種のものは、非常に多いのであるが、神として又此性的のものが随分ある、茲には主として此の性的神の方面の研究を進めてゆきたいと思ふ。前記の駿河、美濃、信濃、の地方へ行くと男女二神併立の道祖神があり中には互に片手を握りあひ、或は女神が右手に銚子を持ち、男神は左手に盃を持つて居るもの等が信州の松本の在にある、又男神が女神の肩を擁してゐるものが梓川の沿岸にある。

これ等二神の携帶してゐる銚子と盃は明らかに生殖器を表現化したものである。

これ等は生殖器神として歴史的變遷の結果として造られた中世のものであることは、その製作によつて證することが出来る。

又男女二体の相互に抱擁してゐる聖天即ち舶來の性的神に象鼻天や或は抱擁した道祖神の石像等もあり、又此等のものをいたく信仰した例證

として奥州の藤原氏が金勢神として六十六体のリンガを製作して遍く領内に配布したなどの傳説もある位である。

その金勢神といふのは説明するまでもなく、此の種の男性神であることは明らかなることであらう。

此の研究によりて非常に興味ある出来事は立川流眞言の出現である。これは性的神の崇拜盛んなる時代に於ては、如何に出現すべきものであるか、要は佛教の根本理想とするもので、口にも筆にも表現することの出来ない不可解、不可説の一の境涯を、兩性結合の精神狀態を以て涅槃にたとへたもので、喇嘛教と共通の意義を具體的に實行したものであるといふこと

とが出来る。

此れは當時の邪宗なるの故を以て悉くこの布教を嚴禁し、その教文を總て埋没させられてしまつたといふことである。

何れにしても極端なる生殖器崇拜から男女兩性の結合の心理狀態を涅槃と考ふるに至つたことは、實に興味深いことであると言はるゝ。

以下現實に現われた事柄について研究の歩を進めてゆくことにする。猿田彦大神はもとく性的神の主なるものであることは此の種の研究を少しでもした人の何人も知つてい



ることであるが、住吉大神も祭神は猿田彦大神であるというところから、ここにもこの生殖器崇拜の風が今にも残っているようである。

土俗玩具を集める程の人は必ずや住吉神社附近に於ける性的玩具の一點や二點を持つていないものはない程廣く行きわたつてゐる。

その尤も多人何人の手にも入つてゐるのは同社附近で賣つてゐる犬の交尾してゐる形を土製にしたものであるが、此の犬については、疝氣のまじないにするという一種の迷信もあるが、かつ好きの花柳界にては他の方面に於て一種の迷信が傳へられてゐるというよりは餘りに多く知られてゐる事柄である。

住吉神社の祭神が、性神である猿田彦大神であるが、故に單にそれ位のもののみでなく尙、他にも此種のものがある。

それは昔のことであるが、キン〇〇と言つた土製の陽形に金色を塗つたものを同社から出したということがある。

然しこれは舟神さんで海上の危難を救うためのものである。

に漁師等に信仰される所以である。

こんな事は實に馬鹿げた事の様ではあるが、この當事者になつてみれば、頗る嚴肅な事柄で生死の境に於て行はれることであるから地上に働く常人を以てしては想像も出来ぬ深い信仰を持つてゐるものである。

即ち此の生殖器崇拜が如何に根強く牢として抜くことの出来ぬ強い信仰を持つてゐるか、ということも證據立てることも出来るではないか、この猿田彦大神が鼻の高い天狗さんの様であること、住吉大神が舟の神さんであること。

その舟と天狗の鼻とを交互に考察してゐる時、又迷信の如何がはつきりとして所謂生殖器崇拜の念の如何に高かつたかということも證しうるものがありはしないか。

昨今では此の犬も禁ぜられたのかその製作をやめたのか知らないが、然しこれはキン〇〇と共に探せば何處かにあるとも言われている。

この生殖器崇拜ということは、何れの時代に於ても甚しく流行したという證左は各方面に際限なくあつて實に驚くべきものがある。

殊は水商賣の人々には一層深いものがある。近世に於ても、この實際の一端として面白い實例がある。

それは明治五年三月のことであるが、太政官令を以て次の様な嚴命が出たことがあつたのである。

從來遊女屋其他客宿等に祭りある金勢神儀は風俗に害あるを以て自今早く取り捨て踏潰すべし

東京では日本橋邊でも盛んにこれを河中に投げ込んだものである。それがためその投げ込まれた神体ばかりで川の面を埋めたということも物の本に見たことがあるが、これから推して見ても如何に多くの人々がこのものを所持してゐたかということも立證せられる。

又この布令で如何に全國到るといふの神社及神体に亘つてこの種の崇拜が行はれてゐたかということも想像することが出来るではないか。

又水戸黄門光圀卿が己れの領内の淫祠三千八十八箇所を毀つたという逸話も残つてゐるところから見ても随分その數の多かつたことを知ることが出来るではないか。

印度内地に於ても、此の崇拜物は實に無數であるというから、單に日本のみではなく全世界に於ても廣く如何に大きく、此の原始的の信仰が持續されてゐたかということが想像される。

更に世界的にこの迷信があつたというところを知る實例としては、かの十字架について見ても分かる。

十字架はもとト字型のものであり生殖器の表徴であるというところは西歐學者の等しく認めてゐるところで、一點の疑うべき餘地のない説となつてゐるが、日本に於ける聖字が又十字と同意義に起源してゐるものであることも言を要せぬことである

佛教の聖字とキリスト教の十字架との暗合は誠に偶然のようであるが、これは寧ろ人間自然の發露と見てこそ、自然の大きな意表の結合を見ることも出来る。

又一説には聖字は十字架の各端を曲げたものであるとも言われているそれは切支丹の驅逐の嚴命が出たとき信者達は十字架の各端を曲げて其の筋の眼を胡魔化してゐたものだと言われている。

その例證とも見るべきものは、日向の國の一地藏尊の如きは冠の中央の紋が立派な十字架をつけてゐることによつてわかる。

然かも全國に存在する、子安地藏の顔貌はキリストを抱くマリヤの像に頗る酷似してゐるとも言われているのである。

とも角、十字と聖字とは共通の點のある。ことは否むことの出来ぬ事實である。

この聖字が、東京淺草觀音大本堂に据えられてある佛具類の側面にも刻まれてゐるのを往々見受けるが、これ等の聖字を撫でては、自分の前を撫でている婦人が屢々目撃されるのである。

これはト字が十字となり、十字が聖字となつた點、又ト字が生殖器の表示である點から見て、子なき婦人が子を授からんとして、祈願に用ゐるときを綜合するならば、迷信の力の恐ろしさを考えずにはいられない

(以下次號)

バナシめ ヨロ



諸國艶咄集成

内海勇造

一、不忍池の新発見

或る先生物学者がいう。「一体西洋人のものの見方は、日本人なんかの思いも寄らないところがあつて面白い。」
いつかもジョルダン博士が来朝した時、上野公園に案内すると、山の上から不忍の池を見て、しきりに面白がつていたので聞いてみると、あの池の形は女性生殖器をかたどつたものだ云うのだ。
なるほどそう言われて見ると面白い、たしかに面白い、僕は早速寫眞に撮つてみたよ」という、そう聞く

と肝心の所に辨天様のあるのも意味がはつきりして来て吹き出したくなる。

二、リంగాを祀れるまさか様

御神体の紛失事件が突發して以來急に有名になつた性的神社が我が八王子市の近郊にある。
草木氏邸の後の小丘に鎮座してゐるのがそれだ。此の草木氏の祖先は天慶の亂をなした平新基の重臣であつたので、故主の恩義を忘れず、我が邸内へ祠堂を建てたのが將門神社であるそうである。
俗に之れを「まさかど」と呼ばす、

まさか様と云いならはしている。
縁結びの神、下の病に靈驗あらたかな社として崇拝する者が絶えずあるという。

その御神体が何物であるか更に知る者がなかつたし又別段此れを知りたがる者もなかつた。

ところ此の神社の所有者草木氏の届により御神体の盗難が分つた。

その筋で百方苦心搜索の結果、同村の有力な土俗研究家の青年の手元にあるのが、それらしいとのことである。その青年に聞いてみると、或る日同神社の側の芝生に於て異様な石製の物を拾得したが、此の異様なものが同神社の御神体とは、神ならぬ身の知る由もなく、只珍しきものと思ひ研究資料として持つて歸つたものであつた。

これで問題の御神体も無事落着。この事件よりして参詣者激増して、繪馬や幟に埋まる有様、中にも娘連などは競つて隨善湯仰するといふ始末。其の御神体なる異様の物を拜觀した者の話をきくに、御文、尺ばかり丸味を帯びた練磨せる石製のリంగాにして實に優秀なる一工藝美術品で、下手な實物は三合も五合も避くべき程の寫實的な作品であると。

三、山國に於ける奇習

管絃祭といへば、誰でも嚴島のお「管絃祭」を思い起すに違いない。船乗りが、夜通し航海の安泰を祈願して祝ひ明すのである。
これが船乗りばかりの祭典かと思

うと決してそうでなく、北部地方の山國に於て、「おかげんさま」を祭り祝つてゐるところが数々ある。
それは大抵十五夜の晩に限られてゐる、中でも面白いのは、その晩に歌われる民謡である。

十五夜の晩に、せぬ奴は云々といふ非常に猥褻に渉るもので、とにかくその夜は一村の男女が、夜七時過ぎになると村の一端にある、茅土手へ出かけてゆく。

そして老幼男女の別なく追つかけて廻すのである。勿論誰か一語も、發しないし、顔は（主として男）頬かむりをしてゐるので、誰かきつぱり解らない。

めい／＼自分の相手を物色するのである。

クス／＼笑う聲もする、突きはなす氣はいい感じられる。

しかし暗いので誰が誰やら解らない。茅土手のあちら、こちらを走りまはるといふ程でもないがとにかく追いつ追われつである。

そうして九時過ぎになるとひとつそりとしてしまふ。

時折り物に驚いて飛び立つ水鳥の様に人が立ち上る、しかし後は又しんと静まつてしまふのである。

時折り茅の音が不自然にする。それつ位のものである。

これは彼等にとつて一年中で最も楽しい日の一つらしい。

まだ肩上げのどれない小娘などもその目をどんなに待ち焦れてゐることであろう、全く原始的で本能的なお祭ではある。

— 6 —

ゴム製雨外套の辯

淺川 曉

僕はゴム製の雨外套である。だが本来の目的に反して僕は時々風船代用として、雨市のオウサンに並べられたりすること、もあれば、色街のいたづら小僧達の手によつて、ふくらまされて、ゴム風船になつて、街の中を、飛んで行つたりすることもある。

然しゆうきもなく、僕の本来の任務は、この強靱なゴムの防壁によつて、あらゆるものを遮断することにあるのだ。

然し強いばかりが能でなく、その特殊な僕の任務のために、又つとめて薄くなければいけない。

昔は、一度のつとめを果すと、塵箱や便所の中へ、捨てられたものだが、最近では、僕等の仲間も餘り澤山いないし、それに又最近では、僕等を必要とする若い人達も急激に増えたので中々忙しい。

それで一回のつとめで捨てられずに、きれいに洗われて、天爪粉等で美しく、お化粧されて二度のおつとめをする僕達仲間も決して少なくないのである。

こんな話がある、或る田舎の學校教師は、妻君と相談の上、僕を用いて調節の道具としていたが、何にせぬ月などというものは薄給で、中々澤山買ひ置くことが出来ない、それ

で一個を度々使用した。

或る時、その妻君が、使用した一つを至極丁寧に洗つて、干しておいた。すると、いたづらな風が吹いて干場から吹き飛ばしてしまつた。

學校から歸つた子供等は、何にも知らぬので、兄弟でああ風船があつたよくふくらむナアと口にあて、よく

らましたり、空気を入れて、トントン叩いたりして遊んでいた。

そこへ友人である男が訪ねてきたが、奥の方では、妻君は一生懸命縫をしていて、ところなのであつた。

その訪客の顔を見知つてゐる子供は、その風船を持つたまゝ奥の母の許へゆき「お客さまが……」と告げたが、母は子供の手元の僕を指さして、子供を叱責したけれども、子供は中々きかぬ。

そこへ客なる人が入つてきて、妻君とばつたり顔を見合せ、更に、僕に眼を轉じ眞赤な妻君の顔と、押えても押えきれぬ訪客の大笑いの聲が玄關の塵を吹きとばした。

又こんな話もある、大きな街の或る大商人、子供がすでに三人あるからというので、調節の目的で、僕を使用することにしてゐた。

しかも月に三回とかにやめてゐるので、一ダースあれば四ヶ月間は買わずにすむ筈である。

産婦人科醫の見た世相ABC

杉田きよし

産婦人科専門のH病院は、大阪中央の繁華に建つた、クレーミナルの近くに、コンクリート建のスマートな妻をあらわしてゐた。或る日のこと十九か、廿才になる娘が、母親らしい上品な五十近い女に、連れられて、院長をひそかに訪ねてきた。

院長は、早速、應接室に通して、會つて見ると、その眼鏡をかけた母親が、しばらく、もぢもぢしてゐたが、娘が最近結婚するので、一時妊娠しないように適當な手術をして、ほしいと意を決した娘に言うのであつた。

院長は、不思議がつて、お目出度い結婚を前にして、妊娠しないようにするなんて、一寸想像もつかないので、どんな理由で希望するのか、と尋ねたところ始めは、主人になる者が、妊娠を望まないのだとか、今子供が出来ると生活に困るから、とか言つてゐたが、その院長が、何にかもつと深い原因があるのだらうと追求すると、遂にその母親は、涙ながらに次の様に語つた。



三人で、幸福に暮してゐりました。それが戦災で焼つてゐた工場が焼けた時、父親も焼死してしまひました。今は僅かに、もと父親の友人で、今は或る會社の重役である、Bの家の一隅を借りて、この娘の収入で細々と暮してゐました。

然し持物がすっかり焼けてしまつた上に、毎日の物の値上りで、思う様に、暮しも立つてゆかなかつた所へ、今度Bより生活費を援助する約束のもとに娘を小間使として世話しようと言つて参りました。娘に話をすると娘もその氣になつてくれましたので、近々Bの世話になることになりました。

然し勿論、年が三十一くつも過すことでしたし、こんな事はそう長く続くものではないと、娘は思つてゐたので、やがては、この娘も嫁入りさせねばならせん。それには、子供が、出来たりすると面倒なので、一、二年の間、妊娠しないように、先生のお力で手術して貰えませんか、と先生にうかがつた。

或る時、いつもの取りつけの薬局の前を通つた時、「例のを」注文するといつて先刻御新造様が、「一ダースお持ち歸りになりましたが」と言つた。

ヘテ不思議、今までは必ず自分で買ひ求めて決して、妻に買わせたことなどないのに、何気なく歸宅して段々調べてみると、妻君は、前から自分の店の番頭と出来合つていて使用するものだと分つたので、大悶着が起つたことがあつた。

けれど、これも僕の罪ぢやないんですよ。

接吻と口腔の科學

八木久一

理想的な口腔と言つても各々好みがあるから一口に言えぬが、接吻通の一人人が私に語つた所によると、「總て淋巴質の女の口腔が一番理想的」だそうである。

つまり肥つた脂肪の多い丸顔の女の口腔である。なるほど豊頬の女の唇は見たところで「まぐろ」の切味のような弾力性と柔軟性に富んでい

る。だが外向に翻轉してはいけない。緊つとしまり色は鮮紅色で、いささか濡れていなければならぬ。火の如く熱くなく、さりとて冷たくてもいけない。

歯は真珠の如く奇麗に揃つていないければならぬ。過剰歯があつたり抜けていたりしてはいけない。義歯

金冠などというものを装置し、加工的に天然の美を傷けたりしたものはもとより落第である。

舌は短かく、口蓋は深いほどよい。おちよば口は唇口よりも歓迎される齒の一本もない口腔は、義齒を嵌めたるものより優るといふことだ。尙處女の接吻は只期待と憧憬の氣持の上だけで何等の價値はないと言われる。眞の接吻の味は、二十四五から三十四五迄の女によつて示されるようである。

春宮圖

と

禁厭

鮎川和夫

加工的な口腔装置は總て口腔に禁物である。義齒、矯正器等はこの類である。金冠等をギラギラ光らしたものは美容上甚だ醜いばかりでなく、接吻事上よろしくない。

(筆者は齒科醫)

彼自身の肉身の妹に、いかに忍びない淫態をなさしめて、これをモデルとして描いたといふ事實さえ明らかになされてゐる。

これは浮世繪師だけが、専ら筆を執つたという譯ではなく、遠く島羽繪の創始者である、僧正覺猷も、あの飄逸至極の筆を以つて、此の種の畫を物してゐるし池大雅堂にも奇



書「春宵橋甲」のあることは、好事家にとつては、相當知れ亙つてゐることである。

渡邊華山に同種の繪巻物がある。單帳紅欄裡の痴態のかぎりをおからさまに描き出した。是等の秘畫や秘本は、人間の飽くこと知らぬ熱情を挑發し、好奇の心を促すことだけを唯一無二の目的として發生したものだといひ難い。

又「女重寶記」や「女今川」と言つた類の書が、女性に欠くことの出來ぬ衛生的、生理的知識を與へるものとして一般に利用されたと同様に未通の女性に對し、その性技の如何なるものかを理解させるのに直接効果的に重要視された。

然しそればかりではなく、更に玩具の一種として重要な役割を與へられてきたのであつた。

現在でも、これを財布に秘めておけば、決して小使いに不自由しないという俗信から、特に縁起を重き視される花柳界の人達によつて需要されてゐることは周知のことと思ふ。

それでは、何故、禁厭の道具として、使用されるに至つたのであるのか、南畝芳書にも「書箱を入れる櫃

の中に、この種の本を一冊宛入れてあるのは、火災を逃れるためである」とある。鎌倉附録に「鎌倉の中に此の種の巻物を納めておき、出陣の時、その巻物を見て笑いを含んで出るときは、その日の軍は必ず勝利あり」と述べている。

その効果が、火除、虫除、戦勝とあるが、結局禁厭の道具として使用されていたことに疑いが無い。

月岡雪嶺というのは、大阪の浮世繪師だが、京師に火災があつて多くの家が焼かれたのに、彼の描いた秘書を入れた一商人の倉だけが、類焼をまのがれたところから雪嶺の描いたものは火除の禁厭に非常に効くという風評が立つたので、おかげで彼の許に注文が殺到したということである。又、中國にても男女秘蔵の圖を描いた磁器や蛤の殻を厄除けに使用したという記録が散見される。

この秘書が呪術の用に供せられるようになったのは、何に起因したものであろうか。これは、古代からの生殖器崇拜の民俗から派生したもので、生を幸福盛詳、死を禍厄と見ていた古代の觀念から來たもので、生殖行為を描く秘書に、殖える福を信じたものである。先に述べた財布に秘書を秘蔵すれば小遣に不自由はしないという俗信又婦女子が、簪物に納め、着物と、着物との間におけば自らにして、衣類が殖えていくという俗信、これらも又「殖える」作用、即ち生殖作用に起因するものと見做しても誤りでないと思う。

(次號春宮圖と誇張)

にせの羅切坊主

信田 春男

今は昔、京に中納言時という方がありました。ある時そのお邸に一人の法師がやつてきた。

色はまつ黒で、短い衣、それに不動装束をかけ、木屐子の大きな珠数をさげている。

「何する坊さんぢや」

中納言が直々にお尋ねの言葉をおかけになると、その坊さんは、いと哀れげな聲で

「この世は假の世。この假の世の儼かなさを身にも心にもしみじみ感じまして、も早や堪えがたく、思えば無始の先より轉々生死轉流するは所詮煩悩にひかされての事、そのためうき世から一步も出られないでいる自分だ。こう考えましたはてに煩悩の根を切りすて、ひとえに生死の境を出でんものと、決心いたしました法師奴でございます」と答えた。

「その煩悩を切捨てるとは」

と重ねてお尋ねになると。

「それは、是れを御覽下さい」

と言いながら、衣の前をかき上げた見ると、あるべきものがない。

これは不思議だと、なお、よく御覽になると、どうも怪しい。

普通より彫れて見える。

「誰ぞ居らぬか」

お呼びになると

「ハイ」

と答えて二、三人の家來が出てきて、

「何ぞ御用でございますか」

と手をついた。

「ウム、その法師を仰してみよ」

仰せかしこまつて侍共が、座を立つと法師は、すつかりてれてしまつて

稱名を聞きながら、

「サア、どうにでもして下され」

いとも物悲しげな顔付して、眼をつぶる。

哀れな覺悟様であつたけれどもそれ位のことと、中納言殿はおやめに

ならない。

「それ足す」

法師は大の字にされてしまつた。

ところで、邸内に十二三位の小侍が居つたのを、中納言は、わざ／＼お呼になつて、

「あの坊主の股のあたりをさすつてやれ」と御命令であつた。

「もうこの位でお赦し下され」

と哀願したが、お許しがない。

小侍は主の命令に従つた。

「態悪い仕儀でございます。もう御免なされて」

二度目の款顧が終るか終らぬうちに相にくと人並に股の間に現れて来たではないか。

「ワツハツ……」

「ワツハツ……」

「ワツハツ……」

主の中納言を始め、集つて見物していた者が、腰を揃えてドツと笑いくづれる。

すると法師自身も、餘程おかしかつたものとみえて、自分まで手を叩いてころ／＼ころび廻つて笑い出してしまつた。

この頭のないインチャ法師は、あるべき物をふくろの中に、ひねり込みそくいでつて、さりげなく人々を欺き物を買おうと企てたのであつた

一九四八年の ある風景



ミキ・登

スピード時代

女「これだけよ」
男「少し高い」
女「ちや止める」
男「よし！これだけ出よう」
女「では十一時にね」
男「今夜のか？」
女「ええ」
男「OK」

3 デパート古木屋にて

女「これは、いかが」
男「いやだねえ」
女「ではこちらはどう？」
男「いやだねえ」
女「ちやあ、この方は」
男「いやだねえ」
女「では、これ？」
男「よろしい、これは？」
女「これだけです」
男「よし！ちや待つてよ」
女「七時から九時までですよ」
男「夜間営業だね」
女「ええ、ありがたうございます」
男「七時から九時、わかつてる？」
女「よしよしちやさようなら」

4 映画館K・K座にて

女「歸りに一緒に出ましょう」
男「貴女のお連れは？」
女「まあ、お二人よ」
男「そうですか、失禮」
女「まあ、いいのよ」
男「出ましょうか？」

女「あら今からもう」
男「出てお茶でも飲みましょう」
女「ええ、ちや出しましょう」
男「どこかへ行きたいなあ」
女「行つても好いことよ」
男「そうですね、ホントですか」
女「ええ」
男「そりやありがたい」
女「でも、愛これだけいるのよ」
男「これだけ？」
女「そうよ」
男「結構です」
女「ちや行きましょう」

5 ターミナルの街頭にて

女「チヨイト、私とつき合な

6 市營バスの中にて

女「どちらえ？」
男「そこまで」
女「お忙しいの」
男「でもない」
女「ちや私と一緒に下りない？」
男「下りよう、どこだ」
女「この次の所」
男「面白いかい？」
女「せいぜい面白くするわ」
男「よし！これはいくら？」
女「これだけ頂戴」

7 裏町の露路にて

男「OK」
女「ちよいと兄さん」
男「なんでも」
女「随分よい御機嫌ね」
男「なにおツ、當りめえだかセイでいるんだ」
女「ホントにねえ」
男「お前はなにしているんだ」
女「ホホホホカセイでいるのよ」
男「なにをカセイでいるんだ」
女「アラいやだねえ、この人は」
男「何にをいやる。聞いているんちやねえか」
女「だからさ、見れば分りそうなものだ」
男「フフ、そりか分つたぜ」
女「何にを今こゝろ、ちや来るかい？」
男「よし来た、これだけで行くんだ？」
女「これだけね、景氣のよいところだ」
男「これだけか、まてーツエと」
女「何を考えてんさ、これが巡つてくるとうるさいんだよ」
男「よしツ、これだけでゆこう」
女「お茶な事をいつするよこの人は」
男「でなけりや、いやよ」
女「チヨウ仕方がないわねえ」
男「それ、いいかい？おい」
女「よし、それこそ組舞だ」
男「何にを言つてんの、そのかわり学生の手で」
女「いいとも、いいとも」

桂色

きたん



きりん

ばあし

——キツスドロ——

午後七時頃、メリヤス女工の梅木ハナさんが阪南町のおぼさんの家で、すこしての歸り市電天王寺公園前で電車を待つていたところ、白のカツターシャツに黒の長ズボンをはいた男がなれ／＼しく近寄り「姉ちゃん、ホルモン料理食へに行かんか」と誘いかけ、断ると腕をつかんで無理矢理に市民病院の横へつれ込みキツスし暴行を加えてからハナさんの手に一圓札をにぎらせた。急報によりかけつけた巡査はまだ同女をはなさずにいる此の男を捕えた。

その夜西成署で保護された彼女は翌朝「私も外聞が悪いですから、何もなかったことにして下さい」と申し述べ司法主任から十圓を電車賃にもらつて歸つたが、その言葉がおかしいのでよく調べたところ、ナント

同女はパン／＼娘として同署にも数回検査されたことのある、したたか者でその男からも百圓貰つたことが判り被害者はアベコベの形となつてケリがついた。

裸劇團に

消えぬ照明

堺の或る劇場で藝術？舞踊「美の聖宴」を上演中のミス日本劇團の至寶踊子の一人が、漸次上衣から肌着に至るまで取り外し、最後の瞬間、眞ッ裸になつても、消える筈の照明が消えず、観客は思はぬ眼の保養をした。

電氣係と舞台の氣が合はなかつたと言つてゐるが、さあどうだか

童貞氏と幼女が

淋病に

阪大病院の皮膚科に訪れた二十八才の童貞氏が局部の痛みを訴え、淋病との宣告に本人は血相をかえ「私はまだ童貞でそんな筈はない」と醫師に喰つてかかつたが、検出された、淋菌を見て仕方なく納得した。

同じく四才の幼女が小兒性陰炎にかかつてゐたと。皆不潔な風呂屋からの傳染とは恐るべし恐るべし。

きたんゴシツブ

銀猫とゆうキャバレーの女給弓子は毎夕五時に開店するその前に、實に電光石火の早業で物凄く活劇を演ずる。

朝十時には、起床、毎夜晩くなる水商賣の彼女としては滅法早い。リントクをばしてすぐお約束の朝陽園へ、そこを切り上げると引き續いて女子苑の地下へ勿論食事は向う持ち。

それが毎日だからチヨツと驚くぢやありませんか。お當人は済ました顔で言います。

「お金さへ持つてゐる人なら闇屋さんでも、何屋さんでも、お望のまゝお相手になります、ただし四十を過ぎた人と二十才前の人はおことわりよ——」

だが残念なことには、その理由がわかりません。

コント

一枚の違ひ

水原 幸助

私は午後、宿を出て〇市の裏町の方へ入つて行つた。實はその附近に面白い傳説のある祠が焼けてゐると言ふことを聞いたのでそれを調べようつもりであつた。

宿で聞いた方へ行つたがどうしてもわからないので、通りがかりの女にたづねた。するとその女達は寄つてゆけというのである。面白半分に着つて見ると女の方から切り出した。

「どうですか、一枚にしておきますか」

「晝の日中からまさか女でもあるまい」

「晝だつて夜だつて同じことさ」

「でもそれが望みで来たんぢやないんだ」

「でも、いいぢやないですか」

「ちや、これで」

私は勇敢に差し出したのである。

「御冗談でしょう、そんなこといささか恐つてゐるのである。」

「ちや失敬しよう。さようなら」

で一枚は一枚でも、種類が違つたので、とにかく病氣は貰わずに失敬した。十圓の方の一枚にして呉れなくてよかつたと言ふわけである。

上海の魔窟

浮田次雄

いやに雨が降りつづいて、肌の下着がべとつく夕暮、昔七つの海を股にかけて歩いた、いや船に乗った、マドロスの古手である。山田老人をその閑居に訪ねた。

こんな満つばい背はなにか、はりつとした話でもして貰はにやと、いやがる山田老人を無理にかりたて、次の様な話をして貰った。

東亞の大都市の中で上海の町ぐらゐ朗らかで、活気があり、同時に奥底の知れぬ薄気味の悪い町というものはあるまい。

老人は昔を思い出す様に、うなづいて話し出した。

上海に限らず港町というものは、ひとくちむろんとする様な淫猥な雰囲気、包まれているようです、然しその港々の中でそうした点で素晴らしいのは何んといつても、マルセイユと上海に越すとこころはありません。むかしから中国という國自身何んとなき猥雑のある國なんです。

食物の調味とか材料とか言つた物の類さへも周到にそれを考慮して、充分に効果的なものを選定していることさへもその一端が伺われるで

はありませんか。

纏足の目的を考えてごらん下さい。あれは婦人を絶對的に専有するとか、腰部筋肉の發達を計るといふ性的原因の外にも一つの理由のあるのを御存じですか、外國人が女の腋臭に昂奮するのと同じ原理で、中國人は、あの變態的に隠し縮められてゐる足から發散する臭氣に無上の愉悅を感じるのです。

無論これは後天的に發見した事に相違ないでしょうが、この魅力が中國で永年纏足の惡習を續けさせたのです。

中國人が、昔から創製した娯樂の種類は凡そ世界に冠たるものです、話が反れましたね。で上海の話ですが、本當の中國の猥雑といつたものは、上海にはありません。

何故かといへば、港というものは元來外國人が、雜然として出入りするところですから、どうしても土地の風習が、純粹でなくなるのです。

上海等は特に各國の外國人が、澤山それぞれの自國風の施設をしてゐるために、殊更に純粹さが失せてゐるのです。例の方も、従つて滅法國

際的です。

インター、ナショナル水商賣という譯で、フランス、ロシア、ポーランド、アメリカ、イギリス等と丸で國際會議です。

地元の中國の方でも、先祖の玄宗皇帝に負けては申譯ないと、上下取り揃えて頑強つて方々に蟠居してゐるわけですね。

私のいつた頃には、日本娘も参加してゐたのです。公然官許の檢査もお女郎屋もありましたが、英租界や佛租界へ遠征してゆくブライベイトもあるという有様でした。

パブリック公園で男が言葉かけようもんなら無禮呼ばりでもしそうな貴婦人風な連中が、しやなりしやなり遊蕩してゐて、これが街の天使とは孔子さまで氣がつくめえです。

取引契約は到つて簡單で、相場は大抵ちよんの間がメキシカンダラー七弗前後で、泊り込みが十二弗内外でした。

尤もこれも上中下といろ／＼ありました。

土地の邊に言わせると、一番多いらしく思えるボーテューギーが實は一番少數だそうで、然かも、大抵は義理の深い兄さんが附いていて盛んに美人局をやつては、鼻下長連の裏口と一緒に賭王迄も溜み上らしてしまふそうです。

眞夜中にワイシャツ一枚でフランス租界をうろついている紳士を見かけるそうです、この連中は大抵は立派な家具やピアノの貸間等に住んでいて、そこへ鴨を喰ひ込むんです。勿論殆んどが皆色男を持つてゐる様です。所謂紐というやつをです。ね。パブリック、ガーデンとかニュー・カルトン、カフェーあたりを繩張りにしてゐるのは上の部で、すつと北の方の陋巷に屯ろしてゐて、お粗末な割ベツト、カーテン一枚向うでは喋々喃々とデンマート語とロシア語のデュエツトが聞かれ、こちちではマレー語とオランダ語という風に親善ぶりが展開されてゐます。

地元の中國の方でもフランス租界あたりに閑雅な莊を持つてゐる高級なところから下は四馬路の裏街のデモン／＼格子の野蠻、中どころでは太馬路の競馬場の前にある一品香旅館あたりへ出入りする娘々と御好み次第です。

佛租界の高級になると近代遊仙窟さながらの到り盡せりで羽化登仙の眞諦を味わせて呉れたり。何とかピンより有効な養汁迄も味わせて呉れます。人間というものは、まことに重寶

に出来ているもので、國境や言語を超越するものは必ずしも藝術だけではありません。

この機亦然り矣なんですからね。四馬路の茶館や大世界あたりの人混みに煙を引具して客漁りとやつていゝる野郎となると、むかしの十二階以上の物凄さで、帽子をとるはおろかポケットへ手突込んで財産を御預けにしようという強請賣色、桃色のテロリストです。

この連中は四馬路の裏通りから露路へずらりとささやかな軒を並べている。

柄相應にこれはちゃんと安いもので先づ玉の井、龜戸あたりの格安相場です。

これは上中下共通なのですが、寢台がまるで佛壇みたりな格構をしていて四方に帷が下りていて、この中で往生しろと言わねばかりです。

上は上らしく錦繡の帷であり、紫襖の寢台があり、下は下らしくメリヤスの帷に米松の寢台という差別のあるのは勿論です。

いやどうも長話になりました。もつと詳しく御知りになりたい方は暮夜ひそかに悠居の戸をお叩き下さい。

戦前の大阪の魔窟、釜ヶ崎は戦災によつて、すっかり焼けてしまった今ではお株は、タミナル、アベノに程近い旭町、界隈に奪われてしまつてゐる。

焼け残つた南大阪唯一の繁華街。阪和線、南大阪線、市電、上町線、天王寺線、省線、地下鉄、と四通八

が、立ち込んでゐる。宵閑迫る頃と共に「夜の妖花が」狂い咲く。

ボン引き、おかまが客が引く、粹客、いきな兄ちゃんがゆく。

「日夜後この附近で佇立または徘徊する女性は何處の女」と認め檢舉する場合がありますから、善良なる婦

行きはよいよい

關所はこわい

妖花乱れる　くるわみち

「金塚街道」に拾う

— 夜の大阪 —

忍

創

弓

達した、交通網に彩られた。

ここアベノは數十萬の雑踏を併呑して、夜と共に獵奇の街は妖しく活氣を帯びてくる。

大鐵百貨店の前の三和、野村西銀行の間を西へ歩むと、両側は雜然とした、飲食店、喫茶店、立喰屋、古衣屋、飲み屋、くすりや、果物屋等

女は御注意願います」

阿倍野警察署のパンパンガール通行禁止の制札もなんのその、だらだら坂の通稱「くるわみち」には夜が更けると共にあらゆるあくが、益々跳梁してくるのだ。

特に厚化粧をした、女装の闇の男「おかま」が強引に變態的な客を、

求めて、夜の雜踏の中を泳いでゐる煙草、パン、いもの立賣りが客を呼んでゐる。

一度足を裏道へ入れ、ば、あそこもここも、淫賣宿が。あやしげな看板を掲げている。

ショート、タイムが、一枚、オール、ナイトが、五枚、六枚の金にてここだけでも數百の女が、夜毎春をひさいでゐるのだ。

旅館と名うつてゐる所は、殆んどといつていゝ位連れ込み客を喰ひ込んで、そのおこぼれを頂戴してゐるのだ。

その外に此のくるわみちより一步を踏み入れた露路という露路には、此れ等の商賣女や變性男子に、室を借して、室代を取つてゐる家が、これ又軒を並べてゐるのだ。

時折り制服の警官が足早やに巡回に来る。

立賣り屋は影をひそめ、ボン引きは裏道へ逃げる。

足を又少し西へ伸ばせば指呼の間有名な飛田の遊廓が、娼妓開放の時勢にも拘らず、焼け残つた高樓から嬌聲が甲高く洩れてくる。

接客婦というの名の下に於てこれ又昔ながらの所賣を續けてゐるし。やりて婆さんの客引きの様子も昔に變らないやうに振舞ひである。

都會から農村から、押し寄せた娼客は、ひきも切らず、こつたかえして續いてゐる。

遊廓が、多數のお茶引きをひかえて待期して、いても、私娼はそれにも増して盛んである。

雑踏を避けて、大門通りより、新世界の方へへ行けば、南霞町よりアベノへ通じるアスファルトの道に出る。

こゝは浮浪者と立賣り屋と、ボン引きとパンベンの巢である。

並木のかげに佇む女たちや、石疊の上にかがむ浮浪者たち。

こゝは又木オンの嫌めく華やかな表通りとひきかえ、きわめて陰鬱で雰圍氣も又じぬくとしてゐるが、又それだけ獵奇に盡んでゐるともいえるのだ。

廣い道をアベノの方へ歩むと薄暗い並木道を、三々五々に何の用か知らないが、若い男が澤山通る。

時々派手な風をした若い女が、チラリと流し眼を光らしながら人波を泳いでゐる。

顔は化粧して美しい割に下駄ばきのきかない足を、あらわに出してゐる。

天王寺線の踏切へ来れば、こゝも宿なし連中の一つの大まりがある。コンクリートの上に腰をかけた列

が、道行く人達を無意味に眺めてゐる。

満員の電車が、がうと通つて一瞬明るさを、ふりまいて後は又静かさにかえてゆく。

こゝから道は坂道になる。鼻先迄顔を押しつけねば男女の區別もつかぬあやめの中で、勇敢な無軌



道娘が、ハンドバックを小脇に盛んに客を漁つてゐる。

パーマメントに、手提鞆をさげた闇の男も、文字通りくら闇からヌツと出て、男の袖にすがりついてゆく

なんでもない通りすがりの男は、こつこつした手で突然握られて、あ

ツと驚くだろう。

然し吸いつくように、意氣投合した二人が、手を取りあつて彼女？の隠れ家か、旅館へ連れ立つてゆく風景も見られる。

こゝから南へ細道を下れば、先のくるわみちへ出るのだが、そのまゝ廣い道を東へ行けば、道は益々暗い左側には旅館の行燈が、軒を並べてゐる。

「兄ちゃん、遊ばない」

まだ十七八の頬のふつくらとした娘が、家と家との間のすき間からとび出して、寄つてきた。

門燈の淡い光りに片頬をかげらし、見た彼女の顔は、闇の女とは見えぬ初々しさがあつた。

「いくらだ」というと、

「二枚頂戴」という。「オールナイトで」はときけば、「お泊り？六枚下さい。泊り賃も含めて」と事務的に答へた。

どうせ、ひやかしの客と思つたのだらう、何にも言わず、黙つてそのまゝ暗闇の中に消えて行つた。

暫く歩いて、もとのクレーマチル、アベノたどりついた。

きらびやかな光りの湯が目にも痛くしみた。

ほつと救われるように、驛の構内へ飛び込めば、石の柱を背にした若い女が、人待ち顔に立つてゐるのにはつたりと會つた。

電車がついたのでか、人の群が吐き出されるように流れてきた。

趣味の友

◎見本要三圖

銀扇社

粹人煖語

いやなやつちやと横目でにらみや惚れたなんぞと思やがる

初會からして帶まで解かせほんにおまえは罪な人

二人裸で手をさしこんでグツト抱きつく花相撲

倒れかかったおやちの家を娘ころんで引きおこし

わけもないのにわけあるように言わりやざりでもせにやならん

わたしいやだよ黒糖のかけじ色もないのに床にいる

三十過ぎたる

獨身婦人の危機

青木富兒

女は青春期になりさへすれば、皆良縁があつて片付くものと極つておれば、至極天下も泰平無事なんだが、中々問題はそうは卸してくれない。容易なことでは縁談の持ち上つてこないのがある。ましてや戦争で澤山の適齡期の青年が、彼女達の夫たる權利を放棄しているの、どうして結婚難になつてくる、殊に男子まさりのいかめしい女には、如何に番茶の出花の十八才頃になつても、縁談を持ち込んでくる者が無い。何んといつても賣口のよいのは、見たところ十人並の美しい娘さんたるに、相違ないが、然し又般若だから、オクメだからとて、そんなに悲観してしまふに及ばない。

昔の筈にある様に「誰喰う虫も好きさき」とやら、世の中には、顔姿なんかどうでも構わぬから、どうでも實用第一の女を娶に迎えようなんてエラク所存の男を固めて探し廻つてゐる奇特な男もいる。

体格の巖丈な女は、如何に、オタフクだからとて第一に、藥の心配がいらず洗濯させても美人の二倍は働くだらうし、衣裳をゆすられる心配もなく、白粉代の儉約になると思えば、こんな經濟的の女は、又とないのである。それやこれやで醜婦にも存外賣口は多いものである。

然し氣性が男勝りといつたような、鼻つばしの強い女は、一寸した美人位では却つて醜婦よりも、賣口はな

く、とかく若い男より敬遠され勝ちである。

けれども世の中はよくしたもので、男らしい女のあるように又女らしい男というものがある。こんな弱い氣象の男は、自分の足らぬ處を配偶の強い氣象によつて補足するもので、不思議に廿七才位になつて「男勝り」という金看板付の女を見れば、直ぐ有難がつて隨喜が涙をもらし「あれは豪い女である」とか「女丈夫である」とか崇め奉り、そんな女を無理にも宿の妻に迎えたがるものもある。何んと言つても、直接に女の身の上を最も多く考へてくれる者はその夫である。同じ家に住んで食卓を共にし、寢室を同じうし、互に肌身を接して暮すのだから、斯くなるのは當然である。

夫婦の間には切つても切れぬ交感關係が結ばれて、夫の感ずる處は妻も亦感じ妻の感ずるところは又夫も感ずるようになる。古來夫婦は異身同休のものだとしてあるが、配偶の關係程互に利害を痛切に感じあう者はないのだ。

然るに女が廿七八才になつても、まだ良縁にありつけず、獨身のまゝで三十の坂を越さねばならぬという事になれば茲に獨身の心細さを必々と感じ、中年の悲哀を催さすにはおそれなくなる。自分のために、痛切に利害を感じてくれる者が、自分以外にないと思えば、心細く思うに至る

のは當然である。

中年になつても子のない女さへ、何となく心細く感ずるものなのに、ましてや三十の坂を越して、中年になつた女が、自分の周囲の同輩が次々と縁づいていくのに、若い人達に追いついていくの、何となく一人孤獨でいるといふことは、いても立つてもいられぬ焦燥を感ずるのは、全く無理ならぬことである。このような獨身女は殆んど想像することの出来ぬ位の煩悶に或は、ヒステリツクに一生獨身で暮すのだとわめいたり、或は氣狂いじみた位に人戀しくなつたりするものである。

三十過ぎで獨身で生活している女の危険は實にこゝに伏在する。

中年獨身の心細さを必々と感じて、寂莫の上なく、べら棒に人なつかしくなつていくところへ、男の顔を見せられたりすると心細さに狼狽している際のこととて、その男の性行が果してどんなものか、その男の人物技術品位がどんな人かという問題を、一々觀察したり、批評したりする余裕なく、恰かも之を救生の船の辨えもなく、人懐きのあまり前後結婚し之を専主を崇めるようになり勝ちである。幸いその男が善良で力量のある男であつてくれれば仕合せだが、十中六迄は多くはグータラであつたり金箔付の女タラシであつたりする。

畢竟こんな惨めなことになるのも心細さの余り狼狽して、渴しては盜泉の水をも搾まぬようになつてしまふからだ。

三十の坂を越して尙良縁がなく獨力で暮している女にとつて、何により大切なのは孤獨の淋しさを自覺した時、狼狽せぬことである。

とかく口では獨身を看板にしていとも、囁かれれば、こぼれむばかりなのが彼女達である。ここに婚姻を逃した彼女達の重大な危機がある。食糧難に住宅難は若い娘にも大きな結婚難の原因となつてゐる。後から讀み競争相手が参加してくるのである。時間が経てば、刻々その競争は不利となつてくるのである。若しかすればもう一生結婚の機会がないかも知れない、彼女達の小さな胸は千々に亂れ、人知れず涙にくれるのである。狼狽するなど、言つても周章であるのが當然である。

その弱點をつけこんで、悪用する者は彼女達の身邊を狙つてゐるのだ。悲觀の末に自暴自棄になつて、自らの女に投じた者や、枯木の様にからからになつて、處女性を失つた者は益々相手にされなくなる。

年はとつても水々しい、青春の張りを持ちつづけてこそ、残つた福を獲得することの出来る要件である。そのためには、學校の教師となつたり商賣をしたり、事務員となつたりして、奮闘として多數の人達に混つて立ち働くことである。希望を失つた乾ききつた精神や肉体からは幸福は生れて來ない。



妖怪物語

お化け狐と狐憑き

忍頂寺 機

私が小學校へ通い始めた頃、往復三里、一軒の家もない山道を通學したのであるが、或る日の歸途、三四人して自分達の部落の近く迄來ると、其處に廣い蕎麥畑があつた。秋蕎麥の花が一面に白く、咲いていた。

見ると一人の男が尻をまくつて、その畑の中をいつさくと歩いてゐる。

よくよく見ると、石川の富さんという部落の者だ。立止まつて見てゐると何時迄も畑の中をあつちへ行きこつちへ行きしてゐる。

時々着物をたくし上げて腰のあたりまで出す。

富さんの白い褲がはつきりと目に浮かんでくる。

私達はとうとう笑い出してしまつた。

「富さん、石川の富さん」と聲を揃えて呼んだのである。

私達を見つけた富さんは、蕎麥畑を抜け出て私達の側まで來ると、本氣な顔をしてゐた。ふと蕎麥畑を振り返つて、富さん

は「畜生……」とどなつた。

「狐の畜生奴、又ひとを騙くらかしやがつて」今迄笑いこけていた私達はビクビクと笑いをとめてしまつた。

こんな話がある。ある村で野つ原に、化物が出て、通る人を坊主頭にするので、近くの村の人達は怖がつて誰もその原を通る者がなくなつた。

或る若い男がそんな位の化物何にが怖いことがあるか。俺が行つて退治して來ると言つて、或る日原へ出かけた。

藪陰にかくれて、もう出て來るか待つてゐると、山の手の方から一匹の狐が出て來る。

街道の真中まで出たら狐は、くると引つくり戻つて、見る／＼美しい娘さんに化けた。

そして道傍の馬車を拾つて背中へ負うと、それが又赤坊になつた。

狐の娘は「お婆さんの處へ連れていつてやるで」と言つて、背中赤ん坊をあやしなからすたく／＼と歩いて行つた。

若者はいゝ所を見つけたと思つてそろつと後をつけてゆくと、娘は隣

村の入口にある茶屋へはいつた。

そして今歸つたと言つと、婆さんが中から出て來て、あゝ歸つて來たか、さあ／＼上れやという。

そこで若者も茶屋へ飛び込んで「婆さん々々今來た女は狐だぞ」と言つと「何そんなことがあるか」と言つて婆さんは一向に取り合わない。

若者は「俺今ちやんと見て來たんだ」と言つても婆さんは承知しないので

「それちや俺が尻尾を出させて見ようか」というと、婆さんが、やつて見れと言つので、若者は藪をやりてさつきの娘を捕した。

ところがいくら焼しても仲々尻尾を出さない。

とう／＼若者は娘を焼き殺してしまつた。

それを見て、婆さんが大變怒つてお前さん娘を殺したか、どうして

れると言つので、若者も困り果て儲かに狐と思つたのだが、どうもこうも取り返えしのつかぬことをしたとさん／＼詫び入れた。

そこへお寺さんが來合せて、お前さん連何にをしられたかと言つから

若者が一部始終を話すと、お寺さん

は「お前さん、人殺したんですかい、それでは坊さんになつて、後を引つてやつたがよからう」という。

若者も致し方がないので坊主になる、ことに決心して、其の場でお寺さんに、頭を剃つて貰つた。

剃つて貰つたが、その剃りようが餘り亂暴で、痛くてたまらなかったので、あ痛た、と言いつながら首を持ち上げてみたら、其處は茶屋もなければ、婆さんもお寺さんも居ない原つばである。

若者は狐に騙されて、頭の毛を噛み切られたのである。

悪戯好きの狐が美しい女に化けて村人を野原の御殿に誘ひ、肥溜の風呂に入れ、牛糞の赤飯を木の葉の皿に盛つて振舞つた等と、化け狐の話は全國遍く行われていて、妖奇に満ち／＼した傳説として、個人心理の中に深く喰ひ入つてゐる。

然し次に述べる狐憑きは更に傳統的な根強い恐怖の念を抱かしめるものである。化け狐の様に單に笑つてすませることの出來ない問題がある

動物の中でも狐憑きは、最も一般に暴威を振うものであつて、此の迷信のために、交情蜜の如き夫婦も悲慘な離縁を敢てしたり、親交水魚の如き朋友も仇敵ならしむことがあり、數十萬の資産も、一朝に蕩盡せしめられる事がある。

或時、狐持の家で親類を集めて佛事を營んでゐるのを、村人の一人が物かに軒先から之を窺見しただけで其の人は忽ち狐に取り憑かれ、常識を失い亂暴に噪り立てたり、或は狐の鳴聲のような奇聲を發したりして

人々を驚かせた。

中々容易に回復しなかつたが、久しく苦んだ上、祈禱によつて漸く回復した。

又或る狐持の女の人、普通の家の男と夫婦になろうとしたが、双方の親が承諾しないので、そのまゝ結婚してしまつた。

そして子まで儲けたが、狐持の女の親は、之れ怒りを感じていたので娘の夫を恐ろしくも呪つた。

何日目に、その呪いは成つて男は妻と間に出来た長女の誕生日に

「眼が痛い」といつて床に就いたまゝ、ぐんぐん悪くなつて、氣の毒にも兩眼は固く閉ぢて、見えなくなつた。

その男の盲目になつた原因が、他にあつたとしても、人々は狐使いの呪咀によるものとして、一般の人々は、非常な恐怖觀念を此の筋の者に對して抱いてゐるのである。

其の外信田の森の葛の葉の狐の話や狐火、狐の嫁入り等、いろ／＼面白い妖奇談が全国的に流布されていて調べてゆくと興味があるものである

襲つてまいりました。

見る／＼そこら一面海のようになつてゆきます。

思案最中の亭主は雷雨の晴れたと同時にボンと膝を叩いて、すぐさま若い者を魚屋へ走らせいなをばしたまひ買入れました。

一方先生は何を持ってくるかと待つ間に程なく料理屋の亭主がニコニコ顔で重箱を抱まいてやつて参りました。

「先生今日の出来事は雷でございましょう」

「うんそうだ」

「では重箱のふたをお取り下さい」

先生早速中をみるといな。そのつけ焼が十串ばかりはいつて居りました。

好色落語

臍

の

次

夢幻亭痴庵

えー今度奇譚クラブとか何んとかゆう本にのせるので、お前も何にか一席辯じろ、いや書いてくれと遙々親友が見えました。何にしろ私のような舊時代の老人には何にも目新しい種もございません。

再三お断り申し上げたのですが、たつてとのお言葉でございませうので極く古いつまらないお笑いを一つ申し上げます。

サテ今はもうすっかり戦災で焼けていますが、その頃、ちよんまげの

時代でございしますから日本でも有数の町でした、泉州は堺の街に甚兵衛という先生がいました。

サテ其の先生、武術ではなく文筆の先生でございします。

其所へ近所の料理屋の亭主が先生に店の看板を書いて貰ひにきました。そこで先生は墨痕あざやかに仕出屋何々とか書いてやりました。

そこで亭主は何を御禮に致しまして、ようかと伺いますと、先生は何もいやらぬと言われますので、段々押問答

の結果、亭主の申しますには「では今日から十日間其の日の出来事に因んだ料理を持参いたしますから晩酌のお肴になすつて下さい」と頼みました所

先生も「それは面白い」とこゝで相談がきまりました。

そこで料理屋の亭主は趣向を考えたりしました。

丁度折よく一天俄にかき曇り、お定まりの雷鳴は天地も崩るゝばかりに後つく雨を伴つて凄惨な夕立が、

「これは感心」と先生すぐさま賞味いたしました。

亭主は明日を約して歸りました。

さて次の日は先生も亭主も何にか變つたことがないかと思つておりました。が昨日の様な夕立もなく一日中かんかん照りつけただけでした。

そこで先生「亭主奴、今日は趣向に困つたろう。それにしても何を持ってくるか知らん」と思つてゐる所へ亭主が今日は重箱を二つ持つてやつぱりニコニコしてやつて來ました。

「先生今日は先に中味をごらん下さい」といので蓋をとると上は松茸の丸煮下は蛤の甘煮がありました。

先生「これはどういふ譯か」

亭主「先生、臍の次には松茸か蛤の外はありません」

(終り)

御用の物

鈴木城夫

人肉の味

玉地耕三

御用の物とはなんでしょう、西鶴の好色一代男に「堺町邊に御用の物の細工の上手ありける」とある。尙京物語に「所々小間物店に六寸ばかりの竹の筒へ御用の物と書いて張り正面に出してあり。これ官仕などして男にあること稀なる女の買うものよし」とあるのでこの御用の物とは嘗て新聞雑誌の廣告にあつた女専用具とか何とか保温器と同一物であらうと粹様ならずとも凡そ想像がつく。戦前の雑誌にはこの種の廣告が載つてゐる。

いつたのであるから又水牛等も盛んに用いられたことが知れるが、右の外色々あるのは申すまでもない。次に種類を大別すれば一、くちり二、張形三、互形の三つを正式のものとし、甲形、鎧形、弓仕拭、ナマコの輪即ちりんの輪などという變態のものとがあり、従つてその一々の使用法も異なることは勿論である。その用法を書かなければ此の文は全然魂を抜かれたも同様で意味をなさないわけであるが、大いに憚るところがあるので遺憾ながら割愛して次に性慾の姑息的遂行専門家と目された此等即ち御用の物愛好者たる御殿物、長局お局さんと呼ばれた奥女中を取材とした川柳を記してみる。

長局けげんなものを賞玩し

紛失の品は云はれぬ長局

長局男の切れ端しを持ち

長局腹にたまらぬものを喰ひ

右でおよその想像がつくと思うが、

尙

牛の角もぐと女が二人出来

此の句は水牛製の互形を言つたものである。

牛の角男妾にさまをかへ

というのもある

長局生でも箱へ入れて持ち

長局くたびれ足へくくしつけ

長局足すりをして泣いてゐる

長局足を早めてよがり泣き

等はずがった所を暗示してゐる。

長いのははやりませぬと小間物や

小間物屋御不幸以後に一本賣り

と小間物屋が出てくるし

張形のひけもの下の方へそり

張形が出て母親をまた泣かせ

張形が新鉢をする惜しい事

張形はきつい毒さと女醫者

等と張形そのものをよんだ句も多い

七つの子供 H生

七つの子供「お父さんとお母

さん兄妹なのだろう？」

母「お馬鹿さんね。何してそ

んなことゆうの？」

子供「だつておかしいな、

それでは、なぜ一つの家

に住んでいるの？」

母「今にわかります」

一般に肉の味は、アルビミンと共に筋繊維内に含まれる一種の汁液によつて生ずるので、牛肉等には味の素と同成分のグリタミン酸鹽があると云ふことである。一般に老動物の肉は硬くてまづい。これは筋繊維の瘦せていて汁液が少いたためであり、且つ筋繊維そのものも硬く、結締組織の分量も多いためである。それに反して牝や幼動物の肉は柔かい。人肉としても之と同一なのは明白だがたゞ特有の味はどんなものか、人肉食用者はどんな風に食べ、又如何に味つてゐるだろうか？

我が國では柘榴の味がすると云つてゐるのは、如何なる理由で言ひ出したものか？食人種の中でフィジイ土人は人肉は豚肉より美味だといひ。マオリの酋長は人肉は豚に似て少しく甘味があるという西太平洋の或る島の土人は丈夫で肥えた若い女の肉が一番旨く手の掌が最も美味だといつてゐる。イースタットの土人は、掌と臀部の肉を最上味としてゐる。という事が昔の旅記に見えてゐる

世はさまざま

浮世色模様

街

の

裏

道

木村 一三

○第一話 ○笑えぬ美人局

メチールの恐ろしいのも、すっかり忘れて山本は四五軒寄つていゝうちに夜も十二時近くなつて、流石にもうこれ以上飲めぬという位酔つていた。そのまゝ家へ歸るのも藝のない話だと、電車通りから反對の裏道を歩いて行つた。

「ホ、大變な御機嫌ね」トロ／＼の醉眼に映つた割合目鼻立のとのつた女の顔であつた。近寄る女に山本は「冗談するなよ、俺は家へ歸るんだよ」とよろめいた。

「いゝぢやないの、今晚、妾の家に泊つてらつしやいよ、もてなすわよう」
「困るなあ」と彼は口では言つたものゝ、何んだかこの女となら一夜の歡樂を求めても、満更でもなさそうな氣がした。

「それ、その角を曲ればすぐ妾のアパートだわ。ねえいゝでしよう」

女は彼の手を握つて振つた。

「どうともなれ」山本はそうつぶやきつゝも或る惱ましい期待で胸をおどらせながら女について行つた。

「酔が覚めるまで話しましょう。酔つていぢや妾が、はりあいがなければ……」

小ざつぱりした女の部屋に上つて山本は妙に氣が落ちついてきた。やがて熱い茶を吸つていゝうちに、ほのぼのと酔が覺めてゆくような氣がした。

「もう酔つちやいないよ。すぐ醒めるたかなんだから」

「まあ、もうさめたの」

女はそう云つて茶碗をかたづけた。

山本はゴクンと唾をのみこんだ。

「君、起きませんか。九時ですよ、もうお出かけにならんとはいけないけ

ないんぢやないんですか」

翌朝、山本氏は泥のような眠りから見知らぬ男の太い低音で起された。

彼は目をこすりながらあたりを見まじした。

女はまだグツスリ寝込んでゐる。

そして寢床の前には拳闘家のように逞しい腕をした男が、キチンと坐つてゐる。

山本はハツとした。



「君は何んですか。何んだつて……へ」

「いや、ご尤もです。實は私はこの女の亭主みたいなもんです。」

貴方がおやすみになつてから、朝九時には起きて上げてくれるように、たのまれていたので……お起したような次第です」

とその男は頭を掻きながら云つた。山本が、早速洋服を着てしようとそ

の男は

「ところで、その……」
と何んだか口の中で言葉をにこしてゐるようすに、山本は昨夜の報酬を催促してゐるのに氣がついた。

「お金はどの位入用なんだ」

「三千圓頂いて置くようにとのことでした」

三千圓！そんなべら棒な話があるかと山本は驚いた。併し男の話によると

「高いと思ひでございまして、うが——實は私達二人はゆく／＼獨立して商賣をしたいと思つてゐるのです。そうすると可成りまとまつた資本がいるのですがどう考えても私達にはこんなどろ／＼とするより外に考へがないので、お恥しいことですがこの有様です」

山本は目の前が眞つ暗になつた何んと馬鹿／＼しい話だ。いや現實であらうか。自分の女房を他人にまかせて資本を作る。という男の言草、彼

は財布の中からありたけの金を投げつけて、そのいまはいい部屋からとび出した。

○第二話 轉落のパートナー

大阪〇〇新聞の記者をしている橋谷君の話である――。

その夜橋谷君はとうに映画もはねた時分に、心齋橋筋の横町にそれて暗い通りに差かゝつた時だつた。四五人の若い女が立ちどまつて何かひそ／＼と話あつてゐる。

見るとパーマネットの髪で、洋装で背十七八の娘盛りであるが、不安氣な様子で不満のありさまが汲みとられた。――レビエールの踊子かな？それともダンスホールの？――

橋谷君がこう思つた時だつた。そのうちの一人が

「だつてあ

んまりだと

思はない。

これつぽつ

もの金で儲

にするなん

て」。

橋谷君は、

敏腕の若手

記者だ

――さては

何にかあつ



「なんだな、よし、いゝネタになるかも知れんぞー」そこで職掌柄娘達の側へ寄つて事情をきくと、案の定、彼女達は今度の飲食店閉鎖に失職したのであつた。橋谷君は彼女等の窮状を色々聞きキャバレー〇〇の支配人の横暴と無慈悲の仕うちを具さに聞いた。心から同情の念を捧げたが、しかしといつて、彼にはどうすることも出来なかつた。そして五・六枚の原稿に書いて社に送つたが、勿論それは記事にはならなかつた。

それから一週間程した夜の事である足の向くまゝ飛田の横道を歩いていたら出てきた一人の男に、言葉巧みに勧誘を受けた。

「旦那、旦那、いいところを御案内いたしましょう。ズブの素人ですぜ決

Y 段談義

あらべすく

芦田敬介

風俗墮落とかにて發賣禁止になつた俳句があるそう。

飛んで来て交んでがへる雀かなは名句だと言ふ。事實自分を生んだ者は母の胸三寸にあつて母より外に知る者がない。「飛んで来て」の句は禁止に價する句ではなからうか。

私生子には大体に於て聰明なる者が多いという。これは男女熱烈なる戀の結晶であるが故だと説明した人がある。

人生最初の性慾發露はおぼさごとこまゝごと、前者はお母さん事、後者は飯事の意味であらう。

「住吉の睦み犬」人達は最近どうなつたか知らないが、實物は實際奇妙怪々。

「顔の赤い女は臭い」と言う。古くから言われてゐる語だ。多血婦人に對しては相すまないが血の臭氣であらうか。

「縮れ毛の女は淫亂だ」という「これも矢張り血液の關係か、但しパーマネット嬢は別。

「千鳥」とは鳥の名ではない昔のお局さんの親愛なるお友達であつた腰形

の美稱であるそう。

人參好きは助平、貝類の多食は精力旺盛だとき。

男子の例の物を判斷するには鼻を見る、婦女の一件を觀察するには先づ其の唇を見よといふ。大体的中すると言つた友人がある。然し責任はもたぬ。

「戀を戀する者程愚かなものはない」と誰やらが言つたが、此れは恐らく体験から來たのであらう。「戀を戀する」時代は人生の中に必ずあり得る。

源氏物語は貴重は文獻とされてゐるが江戸時代の何々ときたらとても源氏物語なんか足許にも及ばない。紫式部女史には甚だお氣の毒だが、我國のその方の文獻の第一に推すことひとり僕のみでなからう。

「性教育」と大看板を掲げていても實地見學團や實地講習會の開催とまではゆかぬらしい。せいぜいつまらぬ生理學が關の山それも謙嚴居士が講師とは嘆飯物。

裸体はエロが藝術かつて、そんなことは分らぬが、少くとも着物を着た

(次頁同様に)

- 21 -

好色本に現れた時代の

早熟なる處女

後藤 二三夫

長い間の荒んだ戦時状態の中に、

生を享けて、しかも根強い封建思想、のきづなの下に生活した現代の女たちが、一度解放されて、暗闇の中より、直射光線の下に出た様に、とまどいした事は、想像にかたくない。

自由主義をはき違えて、無軌道に走つた女も少なくなかつた。

そうして終戦後の混亂に乗じて、都會の盛り場や闇市等で、スリや窃盗を働く小女。素行の悪い女學生等、その余りに早熟なのに驚く、その多くは、十五六才から十八才迄で中には十四才位の小女も混つてゐる。パンパンガールにしても二十才迄の者が、大部分であるようだ。

西鶴の好色本に現れた時代の處女はどうであつたらうか、現代の社會状態と併せ考えると、面白い關連性が感じられる。

「早や十二より格別に色遣りなし

自らきめ細かに爪はづれ美はしく」
(好色一代女) 或は「十三か四か、

髪はすき流し先を少し折などし、紅の絹たゝみてむすび」(好色五人女)

「まだ十四なるべし、自然と玉を延べたる天成、これ結ぶの神の御寶物

にもなるべき物なり(俗つれづれ草)の様によまだ十才そこそこの小むす

めは當時すでに、豊麗優美諸人想い入れもさぞ深いだらうあでやかな當

世女であつた。
さて、彼女達の婚期はと見ると、

現代の様に、三十才に近い晩婚とひきかえ「内儀十四で嫁入りして」

(永代蔵)
「十五六七になるまじきも、縁は前

かと見ればすでにかねつけて眉なし
(好色五人女)

彼女達の處女時代は、實にあつて

なくも、短かいものであつた。

すでに十八になればもう縁違ひという有様であつた。

だからゆつくり娘時代を楽しむというわけではなく、艶麗につくりあげ

た、彼女等小娘達は、自分達の夫たるべき異性を胸に描いた快い空想で

その夫たる男性の胸に抱かれるのが唯一の欲求であり究極の目的であつたろう。

その欲求、空想は、彼女達を直ちに男との肉體關係を連想せしめ、意

識せしめたのであつた。
男女相交わる社交機關のない、又

全然異性から隔絶された、彼女達箱入娘は、その反動として益々異性に

憧れた、實に異性の肉そのものに憧れたのであつた。

好色一代女の主人公、或はお七、お夏の如き、その頃の娘が恐ろしく

案内廣告欄

廣告料 一行十五字 十五日
締切 毎月十日以後 次號

五圓

送れ若い男女の戀愛雜誌新
天地及び目録送呈

青春

國語・物語・小説・夜二冊で
只の五圓で送呈料共五十名

新 天 地 社

月收

固定副業 男女不問
案内書呈

富士營業所

群星

毎月一回發行
中年六十圓 送呈料共

會員募集・投稿歓迎
川柳・詩・短歌・俳句

群 星 社

親交

書籍雜誌趣味品等氣
安く交換買賣出来る

本會の會誌です是非一度御利用下さい
會費 半年30圓 見本誌三圓70圓

親和交換協同會

玉手箱

若い男女への
プレゼント趣味の

参考書寫真文庫繪圖にて急送す
○岩手縣花巻町一日市愛宕六八

郵 燈 書 房

靈氣交流療法

難病克服安眠のまじふ自己療法
實地教授と通信教授説明書五圓要
島根縣松江川津分村 再生會本部

當世娘氣質

M Y 生

水原は毎日出勤する度に、彼女に
遇つた。

何處に勤めているのだろうか。

毎日同じ時刻に出かけて、同じ時

刻に同じ方向の電車に乗るのである

一つからかつてやれ、そう思うと

水原は彼女のすぐ側へ乗つた。

電車が動き出す。

彼は口を切る。

「いつでも一緒ですね」

「え」

「何處へおつとめです」

「あのB社ですわ」

「あゝあのSさんの？」

「え」

水原はそこで更に職務を練つた。

「明日の日曜に、××へ買い出しに
行きませんか」

「え、行つてもいいですわ」

遂に彼女を郊外の温泉宿へ連れ出
すことに成功した。

そして楽しい一夜が過ぎた。

翌日水原が歸ろうとすると、彼女

は言つたのである。

「××圓頂戴、呉れなきや家までつ
いて行くわよ」

編集おぼえ書

×

奇譚クラブは軟派文藝雑誌として、
肩の凝らない。しかも読みごたえあ
る面白い内容を揃えて、毎月お目見
えしたいと思つております

×

全國無名の新進氣鋭の軟派作家のた
めに、全紙面を開放しようと考えて
いますから、どしどし遠慮せず傑作
をお送り下さい。内容さえ秀れてお
れば、手先の技巧の有無は問題とし
ません

×

本誌は大都市の書店賣店にて發賣い
たしますが成るべく半年或は一年極
めの申込をして下さい。軟派物の御
案内や目録の呈送等、優先的にいろ
／＼御便宜をおはからしいいたします

×

今後號を追うて皆様のアツと言われ
る様な奇ばつなユニークなものにし
てゆきたいと願つております

×

此の種雑誌の産立の中にも奇譚クラ
ブは、斷然群を抜いていると言われ
る迄頑張りますから、どうか御援助
下さる様お願いいたします (稔)

奇譚クラブ 月刊

定價 十八圓

(送料二圓)

昭和二十二年十月二十日印刷本
昭和二十二年十月二十五日發行

堺市菅原通四丁三〇

編輯兼
發行人 吉 田 稔

印刷人 意 島 久 藏

堺市北向陽町二丁六四

印刷所 双輪印刷株式會社

堺市菅原通四丁三〇

發行所 曙 書 房

御註文

奇譚クラブは、書店賣の外、直接御註
文に應じます。

地方讀者又は購費に月々入手しようと
される方は、前金にて豫約下さい。

いろ／＼御便宜をおはからしいいたしま
す。

三ヶ月分 六十圓(送共)

六ヶ月分 百七十五圓(送共)

一ヶ年分 二百二十圓(送共)

増賃値上の場合はお知らせいたします